

道真 HAKUSHIN

被災地からの鼓動 3

みんなは1人のために

宮城県南三陸町に住む40代の保育士の女性は、住宅メーカーの話を聞いてあせんとした。

震災前に2400万円建てた家が津波で流された。同じ間取りで見積もりを頼んだら6000万円だという。復興バブル。防潮堤など相次ぐ公共工事で建築資材や人件費が高騰し、被災者の自立を妨げている。

だが絶望は革新のゆりかごだ。津波で多くの職員が犠牲になった防災庁舎。赤い鉄骨だけが残る悲劇のシンボルの近くに昨年10月、希望のシンボルが建った。「さんたろう館」。壁に分厚い木の板を使う日本古来の「板倉構法」研究の第一人者、筑波大学名誉教授の安藤邦広(65)が設計した杉の家だ。

7月21日、ここに地元の世話役、工務店、支援者など18人が集まった。「南三陸木の家づくり互助会設立準備会」。地元の木、地元の大工を使い、安くて快適な家を建てる。人手不足は地域住民の互助で補う。それが会の精神だ。



板倉構法の安全性を説明する安藤教授

復興バブルの前でも、大手ハウスメーカーの住宅は1坪70万円が相場だった。安藤がヒアリングしたところ、被災者が負担できるのはせいぜい坪50万円。板倉構法なら坪60万円建てつが、まだ10万円高い。

政府や県の木材利用ポイント制度を使えば5万円下がること分かった。あと5万円をどうするか。ある日の集会で、安藤がみんなに聞いた。「昔、農村・漁村にあった契約講ってやつは今もありますか」。契約講は集落の互助制度。冠婚葬祭、新築といったイベントのとき集落の人々がお金や人手を出して助け合う仕組みだ。「まだあるべ」。年配の世話役が言った。「だってそれできまじょう」。安藤はひざをたたいた。

30人の講を作り、山から木を切り出す「木出し」や、木材の乾燥作業、棟上など人手がいる場面で労力を提供する。「それならあと5万円下げられます」。地元の森林組合や製材所が請け合った。南三陸の森林は7千畝。板倉構法は通常の3倍の木材を使うが、それでも7万戸分の供給力がある。復興に必要な3千戸は十分にまかなえる。

美しい南三陸の沿岸に日本の伝統美を宿した板倉構法の家々が並び観光名所になる。地元住宅産業や林業が雇用を生む。適度な伐採は森を自然の状態に戻し、そこから流れ込む水は養殖の海を豊かにする。「新しい地域経済を作るチャンスだ」。安藤の頭の中には壮大な復興計画がある。(敬称略)